2011年(平成23年)

第37号

(1月15日)

平安月報

The HEIAN monthly report

発 行 所:立正佼成会 京都教会

発行責任者:涉外部長 宮地啓安

〒605-0041 京都市東山区三条職上 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

卯の刻は夜明け、卯の方角は東、今年は明るい一年にしていこう

中村憲一郎教会長より(元旦参りにて)

1月1日、早朝6時半から京都教会において、「元 旦参り」が行われた。大晦日から降り積もった雪のた め、教会まで来ることができない会員も多く、当日の 参拝者は例年の半分ほどだった。

この足元の悪い中、門川大作京都市長をはじめ、京都佼成議員懇話会(植田喜裕幹事長)の議員の参拝があり、共に厳粛な想いをもって、新年を迎えたことを感謝し合った。

式典では、読経供養の後、門川市長からごあいさつをいただいた。そして、中村憲一郎教会長から『卯の年』の話(3面参照)があり、参拝者一同は「今年は明るい年になるように修行精進しよう」と誓い合った

今年も平和活動を推進

京都教会では、昨年、核兵器廃絶署名「アームズダウン・キャンペーン」を展開してきました。これを単発の取り組みとするのでなく、今年も、世界の平和・貧困の撲滅に向けて取り組んでいきます。毎年実施する下記の取り組みに加え、「ポスト・アームズダウン」の平和活動を推進しようと計画しています。

①アフリカへ毛布をおくる運動

実施期間 4月1日~5月31日

②ゆめポッケ運動

実施期間 6月1日~8月31日

③ユニセフ募金(街頭募金活動)

実施予定 5月15日

④一食を捧げる運動

実施期間 一年間継続実施

これらの取り組みについて、次号以降で紹介しますので、広く市民のご協力をお願いいたします。





門川市長よりごあいさつ

新年おめでとうございます

「仏道」は「見方道」

庭野日鑛会長法話(御親教にて)

1月7日、京都教会において、本部大聖堂および全国の教会と同時に、庭野会長から1年間の心構えをいただく「御親教(ごしんきょう)」が開催された。当日、大聖堂での式典の模様を衛星放送によって、京都教会にも放映された。

庭野会長から「仏道は『見方道』とも言える。もの ごとは本来『ニュートラル(中立)』だが、人は色を つけて否定的・肯定的・感謝をもって見ている。仏法 (教え)を灯として生きることで、人生に安らぎと生 きがいが得られる」と法話があった。

平日参加できない会員は、9日の日曜御親教で、会 長先生の録画を見て、法話を学んだ。

お知らせ(2月の教会行事)

2月 1日(火)朔日参り

9 時~

4日(金)開祖さまご命日

9時~

6日(日)日曜参拝日

9時~

10日(木)脇祖さまご命日

9 時~

家庭教育

15日(火)涅槃会

9 時~

今年の京都市内の正月 くじかれた人も多かろくじかれた人も多かろう。積雪量が9㎝で、1 目の記録だそうだ。 一方、鳥取県では、大 で大勢の方が新年を過たり、生日、かったり、炊き出しされた。 たいっ話はなくなった。 に一度の大雨で、鴨川上でが、千年の昔からない災害への中に人ののぬくもりを感じされた。 たが、千年の昔からだということで、今人にひとりでありをある。 でだが、千年の昔からだという話を伺った。七十年の時になっても乗り起えて、時川上された。 を住ということで、ダムを造ろうとしたとい。それより、災害への対処をもりを感じされた。 で大勢の方が新年を迎えるからない災害への対の中に人のでありた。七十年の昔から、洪 がらない災害への対の中に人の中で、1 をたとき、適切に対応でありた。 きたとき、適切に対応でありたいものだ。

60周年を迎える新宗連

~新宗連青年会は50周年~

新宗教教団の結束をもって世界平和の実現と人類福祉の増進に寄与することを目的に発足した「新日本宗教団体連合会(新宗連)」は、今年60周年を迎える。宗教協力の推進と信教の自由の堅持を柱に、〈平和と自由〉の世界を築こうと、核兵器廃絶、開発、人権、環境など人類が直面している諸問題と取り組み、地道な活動を展開してきた。

また今年は、新宗連加盟教団の青年の組織「新宗連 青年会」が発足して50年目にもあたる。昨年、青年 会では東京から大阪まで平和の灯を手に、プレたすき リレーが行われ、今年は本番を迎える。

そこで、この意義ある年に、同京都府協議会の加盟 教団の青年による「新宗連青年会近畿連盟京都府委員 会」設立しようと、1月21日に初回の会合が計画さ れている。

第31回普門合唱フェスティバルに出演

京都教会コーラス部「コールコスモス」

平成22年11月28日、本部普門館(東京・杉並)において開催された「普門合唱フェスティバル」に、京都教会コーラス部「コールコスモス」が参加した。同コーラス部は、普門館落成40周年記念であった平成21年にはじめて参加し、今回、2年連続出演に挑戦した。

全国37教会の内6番目の出演で「誓いを胸に」「B i r d E y e s 鳥になった瞳(トルコマーチより)」の2曲を披露した。

「コールコスモス」は平成6年の京都普門館落慶と同時に発足、桐山先生の熱心なご指導を受けて16年継続してきた。教会のご命日や式典で、仏賛歌を歌い、聴衆の仏さまへの帰依心を高め、会場の雰囲気を和ませている。

現在、「コールコスモス」では、コーラスに参加する 人を増やしたいと、部員を募集している。

京都市成人の日記念式典開催

本会青年部がボランティア

1月10日(祝)、みやこメッセにおいて京都市成人 式が厳粛にかつ盛大に開催され、新成人約8000人 が新社会人となった。

京都教会青年部では、毎年、京都市の青年の活力に 結び付けたいと、成人式の運営に協力している。今回 は、青年部から館外誘導や場内ブース担当に18名、 法輪クラブから姓名鑑定に6名のボランティアが参加 した。

姓名鑑定には毎年80組を超える新成人が訪れ、自 分の将来や恋人との相性などを占ってもらい、話を聞 く成人者の笑顔の中にも真剣さが見られた。







受験生の実力発揮を祈願して ~合格祈願供養~

平成22年12月18日、受験生を対象にした「合格祈願供養2010」が開催された。受験祈願のご供養、お守り授与の後、中村教会長が心構えを述べた。

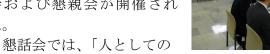
式典後、受験生各 自で絵馬を奉納し 志望校合格への努 力を誓った。





来年も学び合いを誓う 京都佼成議員懇話会

平成22年12月22日、 京都教会において18名の議員が参加して、佼成議員懇話 会および懇親会が開催された。



あり方」を学び、懇親会で教会役員との交流が行われた。参加議員は今後も「自分磨き」に努め、市民に支持されるよう学び合うことを誓った。

●生かされている

(佼成会のことば)

私たちは自分一人の力や意思で生きてきたように思って、自己中心になりがちです。しかし、私たちが夜、眠っている時、その間も無意識のうちに呼吸をしています。血液も循環しています。このことを考えただけでも、私たちのいのちは自己の力や意思を超えた偉大

なものによって与えられ、支えられて生かされている のです。

自分を超えた絶対の存在である仏に「生かされている」ことに気づくと、自分の偉大さにも目覚めることができますし、無条件でうれしくなります。

そして、この世の中を仏さまの願われる常寂光土に するため菩薩行に励み、他を生かす働きをせずにはい られなくなってきます。「生かされている」ということ は信仰を持つものだけが味わえる深い喜びなのです。

今月の言葉 ~救い、救われの本質~

京都教会長・中村憲一郎

明けましておめでとうございます。

清新な雰囲気の中で新年を迎えられたことと存じます。本年は「卯の年」、気学上「卯」は東に位置し、「卯の刻」には太陽が地上に現れ「新しく始まる」という意味を持つ、といわれます。すべてが活動的になり、明るさみなぎる年になりそうです。

さて新年の会長法話は、「救い、救われの本質」です。 これは信仰の原点ともいえる重大なことです。私たち は様々な困難に遭って悩み苦しむとき、その苦しみを 一刻も早く取ってほしい、解消してほしいと願います。 目の前の苦が軽減すればそれでいいわけです。しかし、 会長先生は「仏さまからすると、それは方向が違うの ではないでしょうか」とおっしゃるのです。

「仏教の本質的な救われ」は、私たちがすでにいただいている幸せに気づき、「ありがとう」と感謝の心で受けとること、自分がすでに浴している恩恵に気づくことが、そのまま本質的な救いなのです、と説く会長先生。すでにいただいている恩恵(大自然の恩恵、先祖・父母・子供の恩、他の人々からいただいているご恩等々)を自覚し、「ありがとう」「おかげさま」が、毎日の生活の中で数多く口にできる私たちになることが、仏教の本質的な救いをわが身に顕現することになります。「ああしたい」「こうしたい」「あれがほしい」「これがほしい」という求める人生から、感謝の人生への転換こそが最大事なのです。

そのためには、「ご法の習学」を通して、くりかえしい申し上げます。

仏さまのものの見方を学ぶことが大切です。

先日ある方から、「私は肝心な時にいつも問題が起こり、皆さんに迷惑をかけてしまう。仏さまは何を教えてくださっているのでしょうか」と深刻な顔で尋ねられました。その言葉を聞かせて頂き私は、その方が自分の足りなさを責める気持ちになっていることに心を痛め、「私たちはつい普通の日と肝心な日とに区別するけど、仏さまから見たらどうなんだろうか。毎日が肝心な日じゃないですか。毎日が一日一生、毎日の生き方が肝心、と教えて下さっていますね。だから、その時、その時のご縁や条件の中で、為すべきことをしっかりと行っていく、それが大事で、起こったことやご縁を特別に問題視しないことが大事ではありませんか」とお応えしました。「そうですね」と言った彼の顔は晴れ晴れとし、次の行動が全く違うものに私には映りました。

原因を求める心境から、今目の前に起こっていることに真剣に取り組むことが大事、と受け取れた瞬間でした。「仏さまのものの見方を学ぶ」、私自身もこのことの大事さを彼を通して学ばせて頂きました。

「人間の幸不幸は、その人の心が決める」と申します。すでにいただいている多くの幸せや、すでに浴してるたくさんの恩恵を自覚し、「今日を大事に生きる」をモットーに、「愚痴や不平」を言わない生活を、一年を通して心がけたいと思います。本年もよろしくお願い申し上げます。

支部紹介のコーナー

"ありがとうおかげさま"のつどい

平成22年12月25日、教会研修室において京洛 支部では、会員40名が参加して、1年間の感謝を込 めて"ありがとうおかげさま"の集いを開催した。

参加者は、1年間「"すべてが仏さまのプレゼント" にありがとう!の気持ちで、一人ひとりと触れあいを 重ねたおかげさまで、目の前の苦にとらわれず人の良 さを見てありのままに感謝できるようになった」と喜 びを確認しあった。

田中京洛支部長は、この集いで「お互いの喜びをさらに分かち合え、"ありがとうおかげさま"という明るく楽しい"善き友"になれた」と感想を述べた。





地域貢献活動の紹介

第23回京都市社会福祉大会

1月7日(金)京都ホテルオークラにて第23回京都市社会福祉大会が門川大作京都市長、村井信夫京都市社会福祉協議会会長をはじめ各区役員など出席の中、開催された。

第一部式典では今回の市長表彰、社会福祉協議会会 長表彰への授与式が行なわれ、「中央明るい社会づくり 運動の会」が永年の活動の功績を称え社会福祉協議会 会長表彰を受賞し、代表者として中道吉信氏が壇上に 上がった。

同じく同賞にはユース21京都で永年役員を務めた 植田恭司氏(渉外部スタッフ)も受賞した。





庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《天台山での誓い》

伝教大師が乗った船は 54 日間も会場を漂流して、ようやく中国にたどり着いた。まさに一命を賭しての旅だった。こうして天台山で法華経を学び、それを日本に持ち帰った伝教大師が、比叡山で日本天台宗を開いたのが延暦 25 年である。鎌倉仏教の祖師方は、そろってこの比叡山で学び、そして山から下りて、それぞれの宗派の祖となった。

法然上人は浄土宗、栄西禅師は臨済宗、道元禅師は曹洞宗、親鸞上人は浄土真宗、日蓮聖人は日蓮宗の祖師となられている。伝教大師に「一目の羅は鳥を得ること能わず」というお言葉があるが、それは、一つの目しかない網では一羽の鳥さえも捕らえられないように、一宗だけでは、様々な機根の大衆を救うことはできないという教えである。仏教には八万四千の法門があると言われるが、それも、様々な立場の人を残らず救いとるためであって、禅でなくては、念仏でなければ、題目でなければと争っていたのでは、一人の人も救えないことを戒めているとも受け取れよう。

まさに宗教協力の原点を示されたお言葉で、それを時代にあてはめれば、キリスト教だ、仏教だ、イスラムだと、互いに争いあうのでなく、それぞれの宗教が時代や人々の機根、風土、文化にふさわしい形で人々を救うために存在していることを自覚し、互いに尊重しあい、力を合わせなくてはならないことを教えられていると解せるのではないだろうか。

庭野開祖が恩師の新井先生から初めて法華経を学んだ時、新井先生は「霊鷲山、天台山、比叡山に参拝して初めて、法華経の教えの本家本元へ道がついたことになる」と教えられたが、その念願の天台山参拝が、中国仏教教会からの招待で実現したのであった。

昭和57年5月2日、成田発の日航機で上海へ。ホテルに一泊して、翌日、上海から3時間の汽車の旅で浙江省の杭州に着き、そこから車で6時間、200キロの道を走って天台山に到着した。山門まで出迎えて下さった国清寺住職の唯覚法師は、中国仏教教会訪日友好団の一員として、4年前に趙樸初師とともに立正佼成会を訪問されている方であった。「庭野先生がおいでになる日を、首を長くして待っておりました」唯覚法師は自ら広大な境内を案内して下さった。

楠の大木がうっそうと茂るなかに建つ弥勒殿、大雄宝殿と参拝したあと、1本の梅の古木の前に、私たちを案内された。「この梅の木は隋の時代から 1300 年も生き続けてきて、もう長い間実をつけなくなっていました。それが去年は3つぶ実をつけました。そして、今年はこんなにたくさんの実がついたのです。これは尊い友人が天台山に来る瑞兆に違いないと思っておりました。そして、きょう庭野先生をお迎えできました」身に余るお言葉に庭野開祖は恐縮した。

《朔源》

国清寺に宿泊した夜、独り静かに眼をつむっていると、漆黒の闇に包まれた裏山から、ときおり美しい鳥の声が聞こえてくる。「ああ、これが深山で鳴くというブッポウソウという鳥であろうか。いや、ブッポウソウは鳴き声を名前にしたもので、正式にはコノハズクだと何かで読んだ覚えがあるが・・・」と、とりとめもないことを考えて、なかなか眠れない。

五月とはいえ山の空気は冷たい。聞こえてくるのは、よく透るコノハズクの鳴き声だけである。その声が途切れると、いっそうあたりは静寂に包まれる。眠れぬままに、庭野開祖は色々なことを考えていた。想起したと言うべきかもしれない。これまで、いちずに仏道を歩んできた胸の中に底流している仏さまの教えを、あたかも河を遡行するようにたどってみたのであった。

思えば、日蓮ご聖人から多くのことを学ばせて頂いた。「如来の使い」としての不自借身命の精神、そして信徒の嘆きにともに涙されるやさしさ、さらに、教主はあくまでも本師釈迦牟尼仏でなくてはならぬこと。また法華経に出てくる地涌の菩薩をたんなる譬えと見るのでなく、これこそが菩薩のあるべき真の姿ととらえ、自らも実践されたことなど、教えられる所はまことに大であった。

日蓮聖人は、言うまでもなく比叡山で学ばれて伝教 大師最澄の教えを学び取られた方である。その伝教大 師は、奈良時代の仏教が経典によらず解説書すなわち 「論」に偏っているのを批判して、「法華経」を根本 経典として、日本を真の大乗仏教国にすることを目指 された方であった。

(つづく)

渉外部からのメッセージ

お陰さまで平安月報発行4年目を迎えます。「一年の計は朝にあり一年の計は元旦にあり」ということわざがありますが何事も最初の計画が肝心と教えて頂いています。手探りのまま発刊した本誌ですが4年目に入り、まだまだ手探りのような状態です。最近みなさん

から「楽しみに読んでいます」という投稿をよく頂くようになりました。観世音菩薩のようにみなさんの声を聞ける編集者になろう…が計画かもしれません。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。 RKK 京都教会 FAX 075-762-2266